

土木工学・建築学委員会
デザインをめぐる知の構築と社会的理解分科
(第26期・第1回)

議 事 要 旨

1. 日 時 令和6年2月28日(水) 14:30~16:00
2. 会 場 オンライン会議
3. 出席者 佐々木 葉・伊藤 香織・小野田 泰明・小野 悠・片桐 由希子・川崎 昭如・近藤 存志・斎尾 直子・坂井 文・田井 明・高橋 良和・中嶋 節子・松田 曜子・村上 暁信・山本 佳世子
※下線は欠席
事務局：藤田 崇志

4. 議題および決定事項

(1) 自己紹介

各委員より自己紹介およびデザインへの関心が述べられた。

(2) 分科会設置目的の確認

資料1と参考資料3に基づいて、佐々木委員より本分科会の設置趣旨と第25期の取り組みに関する説明があった。

(3) 委員長、副委員長、幹事2名の選出

委員長を佐々木委員、副委員長を田井委員、幹事を小野委員、斎尾委員と選出された。

(4) 今後の予定

2024年5月27日(月)に学術会議で開催される土木工学・建築学委員会全体会について案内があった。

(5) 議事要旨の委員長一任について

参考資料2に基づいて、議事要旨の公開などに関するガイドライン、議事要旨の委員長一任について審議し、了承を得た。

(6) 分科会委員間のメールアドレス共有について

参考資料1に基づいて、分科会内でのメールアドレスの共有、メール審議の実施要領について審議し、了承を得た。

(7) その他

片桐委員より「ランドスケープの視点から－未来の風景を共有する」と題して、地震の被害を受けた能登の自然や歴史文化、景観、社会状況、中学生を対象とした未来の風景を創造するワークショップの取り組みについて話題提供が行われた。その後、自然や文化などの地域資源を活かした復興のあり方について議論が行われた。

斎尾委員：一部、海面が下がった（地盤が隆起した）ことで景観等はどう変わるか。

片桐委員：地盤の隆起で漁港が使えなくなり、小さな漁業ができなくなっている。人口減少・高齢化が著しい地域において、漁港ひいては漁村の復興をどう考えるか、議論が必要。

高橋委員：被災して安全性を望む住民が求めるデザイン、工学的裏付けのあるデザイン、このバランスをどうとるか、難しい。デザインと防災はひとつの切り口になる。

片桐委員：道路の復旧においても、今後住民がメンテナンスをしていけるのか、長期的なタイムスケールで安全性を考えること、また、その見える化が大切である。

伊藤委員：東日本の復興においても時間経過によって住民の気持ちや望むものは変化した。100年先を見据えてつくるなら、つくるのにも時間をかける必要がある。一方で、被災者は早く再建したい。このバランスをどうとるか難しい。

片桐委員：能登においても公的解体をどこから行なっていくのか、誰がどのタイミングで言うべきか、住民の納得が得られるような進め方が議論になっている。

今後の議論の柱について意見出しが行われた。

佐々木委員：坂井先生がやられているイギリスの都市計画におけるデザインの位置付けなど、国外における政策や取り組みを議論していきたい。

坂井委員：経産省が JAPAN+D を始めたり、東京大学で College of Design が検討されているように、官や学でデザインという言葉が使われるようになっている。こうした取り組みをレビューしていくのはどうだろうか。

小野田委員：イギリスではデザインをバリューとしている。デザインをめぐって政策とバリューをいかにつなげるのか、国際的に政策比較する必要がある。日本では両者のつながりが弱い。また、土木と建築をどう結ぶか、総論としてではなく、具体的にいかにつなぎをいれていくか議論していく必要がある。